言の波

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

# 永井隆博士と被爆地浦上の再建

## 永井発言「原爆は神の摂理」の意味するもの

片岡　千鶴子
長崎純心大学

八月が近づくと、永井隆博士の「原子爆弾が浦上に落ちたのは大きな御摂理である。神の恵みである」という言葉は、原爆に抵抗を示さなかったことであり、広島に比べ長崎の平和運動を低調にし、またアメリカの原爆投下を正当化させた、という批判が登場する。

しかし、この言葉がいつ、どこで、どのような文脈の中で、何を意図して述べられたのかの検証はされず、この部分だけが切り取られて批判、利用されていると思う。この言葉は『長崎の鐘』の「十一　壕舎の客」中にある。

『長崎の鐘』は被爆した原子医学者・永井隆の長崎原爆の記録である。博士は執筆の理由を「原子爆弾の真相をとどめ資料として残すこと、世界が二度と原爆と原爆の惨禍を繰り返さないように叫びを上げるため」と記している。

『長崎の鐘』は十二章で構成、十章までが「真相をとどめる」ための記録であり、第十一～第十二は浦上の原爆の惨禍からの再建の章である。「原子野浦上の再建と平和の確立」は博士の最大の願いであり、被爆から死までの六年間の命はそのために捧げ尽くされた。

＊　＊　＊

被爆後の荒涼とした原子野に、二つの風説が流れていた。一つは、「原爆は天罰なのだ。神はわれわれの罪を罰して、われわれの家族を殺し、教会をさえ焼かれた」というものであった。敗戦による虚脱感と原爆の惨禍による絶望感の中で、この風説は人々の心をさらに暗くしていた。博士は心を痛めた。原爆は天罰であるという考え方は、カトリックの「死生観」と「苦しみ」に対する教えに反するものであり、死者への冒涜であった。

「十一　壕舎の客」は、「原子爆弾は天罰ではない」、原子爆弾という「苦しみ」がなぜ浦上の地に与えられたのかを、カトリック者として信仰に基づいて考えようではないか、という呼び掛けの章である。まず、原爆で家族を失った復員兵、浦上の熱心な信徒・山田市太郎さんに「原子爆弾は天罰なのか」と質問させて問題提起を行い、被爆死者のための合同葬儀ミサで、生き残った信徒を代表して、永井博士が読む弔辞の内容を示す。

浦上は、信徒一万二千人のうち八千五百人が原爆で命を失った。「…神の摂理によって爆弾がこの地点（浦上）にもち来たらされたものと解釈されないこともありますまい……」と弔辞の中で述べる「神の摂理」には、カトリック信仰による次のような意味があると思う。私たちは原爆という未曾有の悲惨（苦しみ）を戦争という罪の償いとして、キリストの十字架の犠牲に合わせ、神に捧げる術を知っているのではないか。だからこそ神は浦上に、キリストの協贖者となることをお求めになったのではないだろうか。八千五百の家族の死は天罰などではなく、十字架上のキリストと共に神に捧げられた尊い犠牲だったのではないか、生き残った者たちにも、この「苦しみ」を死者と共に捧げることによって、敗戦と廃墟から立ち上がることを、神は求めておられるのではないか、という信仰者の深い宗教的自覚からの言葉であったと考える。

「十一　壕舎の客」の章は、被爆地浦上のカトリック信徒の精神的再建の物語であり、その視点から「原爆は神の摂理である。神の恵みである」という言葉の意味も解明されなければならないと思う。

＊　＊　＊

もう一つの風説は、浦上には七五年間草木も生えず、人間も住むことができないという説であった。永井隆は十月十五日付で提出した『原子爆弾被害者救護ノ報告書』に爆心地居住の問題を取り上げ、放射能残存の調査の必要を挙げている。そして博士自ら同日より「爆心地上野町に壕舎を立て、その中で生活を始め、周囲を注意深く観察し…」、蟻の群れや植物の発芽を発見、人類は生息できると考え、浦上の再建を決意する。「十二　原子野の鐘」はこの風説に対する回答であり、浦上再建と平和への叫びの章である。

＊　＊　＊

永井博士が弔辞の中で「弱い私たちが廃墟から立ち上がり、十字架の道をたゆまず進むことが出来る勇気を聖母の取次によって祈って下さい」と祈ったこの日から、浦上の再建が始まった。

# Q&A…

# 「原爆は　神のせつり？」

永井　隆

**Q．いわゆる「永井発言」とは何ですか。そして、それはなぜ問題視されているのですか。**

A．世界でただ二つの被爆都市・広島と長崎は、その被爆という事実のゆえに、その後の平和運動と核兵器廃絶運動のシンボル的な存在となっています。

そして、「活動の広島・祈りの長崎」と言われるように、平和運動への取り組みにも質的に違いが見られることも事実です。

「祈りの長崎」もりっぱな平和運動ですが、祈りと活動とを分離して強調する方々の目で見れば、低調だと思われてきたのでしょう。そしてその原因として、いわゆる「永井発言」が取り上げられた、ということになります。

それは、彼の著書『長崎の鐘』の中に、浦上天主堂で行われる被爆犠牲者のための合同葬儀での弔辞の中で彼自身が読む予定だとして挿入されている、「神の摂理によって爆弾がこの地点にもち来たらされたものと理解されないこともありますまい」という一文があったからです。

……

**Q．カトリック者としては、その批判には大いに問題があると思いますが、どう考えたらよいのでしょうか。**

A．どう考えるべきかを一律に規定することはできませんが、第一面でシスター片岡が書いておられるように、この発言によって平和運動が低調になったと判断するのは、的はずれだと思います。

まず、この発言はキリスト者である永井隆博士の信仰宣言である、ということです。そして、その信仰に支えられて、博士は廃墟の中から力強く立ち上がる力を得ることができたし、火のような熱意を持って戦争反対を叫んでおられたからです。

……

**Q．博士は、具体的にどんな平和運動をされたのですか。**

A．ご存知のとおり、博士はX線と原爆との二重被爆をされた方で、最後にはあのたった二畳の部屋で寝たきになりました。しかし、それまでは、シスターが書いておられるような活発な活動を展開されました。それからは、「ペンは剣より強し」ということばがあるように、死力を尽くしてことばによる活動を続けました。『いとし子よ』の中で、現在の日本の状況を予測しておられたかのように、こう記しています。

**私たち日本国民は憲法において戦争をしないことにきめた。憲法の第二章は、「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」ときめている。どんな事があっても戦争をしないというのである。**

**わが子よ―。**

**憲法できめるだけなら、どんなことでもきめられる。憲法はその条文通り実行しなければならぬから、日本人としてなかなか難しい処があ**

**るのだ。どんなに難しくても、これは善い憲法だから、実行せねばならぬ。自分が実行するだけでなく、これを破ろうとする力を防がねばならぬ。**

**これこそ戦争の惨禍に目覚めたほんとうの日本人の声なのだよ。しかし理屈は何とでもつき、世論はどちらへでもなびくものである。日本をめぐる国際情勢次第では、日本人の中から、憲法を改めて、戦争放棄の条項を削れ、と叫ぶ者が出ないとも限らない。そしてその叫びが如何にも、もっともらしい理屈をつけて、世論を日本再武装に引きつけるかも知れない。**

**そのときこそ。…誠一よ、カヤノよ、たとい最後の二人となっても、どんな罵りや暴力をうけても、きっぱりと「戦争絶対反対」を叫び続け、叫び通しておくれ！　たとい卑怯者とさげすまれ、裏切り者とたたかれても「戦争絶対反対」の叫びを守っておくれ！**

**Q．1981年の2月に故ヨハネ・パウロ二世が日本においでになり、「戦争は人間のしわざです」とはっきり宣言されたので、やっと摂理的閉塞感なるものから解放された、という人もいるようですが・・・。**

A．朝日新聞6月22日号に、爆心地から約1.4キロ離れた大橋で被爆された、片岡津代さんの心の葛藤が記されています。「人類のあらゆる罪悪の償いとして神様から浦上の信者が選ばれたのだ」と、あまりの惨状にそう考えざるを得なかったと…。

しかし、「戦争は人間のしわざです。過去を振り返ることは、将来に対する責任を負うことです」ということばで心が洗われ、60歳で語り部となり、被爆体験を語り核兵器廃絶を訴え始めるのです。

このときまで、彼女が自分なりの運動へと解き放たれることができなかったというのは、実は、永井発言の影響というより、当時の教会で一般的になされていた、恵みや摂理についての解釈に大いに起因していた、と言えるでしょう。神の恵みや摂理についての理解が博士のように外に向かう力となるまでには、当時の教会全般の理解度は熟していなかった、ということにもなりましょう。それは、私たちがミサの終わりにいつも「行きましょう」ということばで派遣されているのに、「主の平和のうちに」福音を宣べ伝えるために出かける行動へとは必ずしも結びつかないのと似ているのではないでしょうか。

そして、長崎の平和運動が比較的盛り上がらなかった理由としては、シスターが指摘しておられるような「天罰説」の他にも、「原爆は最初から、長崎にではなく、浦上に落とされたのだ」というわさが流れていた、という点も挙げることができるかもしれません。歴史的には浦上は長崎ではなかった時代もあるし、キリシタンあるいは被差別の方々が住む所に天罰として原爆が落とされた、という風評もあったと言われています。

**Q．今年の被爆60周年に、「祈りの長崎」はどのような変化を期待されているのでしょうか。**

A．まず、祈りの見直しが必要なのではないでしょうか。「祈りと活動」という二元論的な考えを改めなければならないでしょう。すべての活動は祈りに始まり、祈りに支えられ、祈りへと開かれていくべきものだからです。

そうでないと、平和も正義も人間のみのもの、自分だけのものとなって、他の人の考えを拒否し、時には敵視するようにさえなりかねません。平和の名のもとに戦争さえしかねない、ということにもなるでしょう。

日本の平和憲法は、そういう意味では、祈りに満ちたものとも言えるでしょう。永井博士は、「いとし子よ」ということばに、後世に生きる人々も含めていたのかもしれません。

その遺言とも思えることばに、じっくり耳を傾けてみたいものです。

**「いとし子よ。**
**敵も愛しなさい。愛し愛し愛しぬいて、こちらを憎むすきがないほど愛しなさい。愛すれば愛される。愛されたら、滅ぼされない。愛の世界に敵はない。敵がなければ戦争も起こらないのだよ。」**

平和記念像

# 「参加する教会」をめざして（1）

## キリストの友情への参与

### はじめに

このシリーズではこれまで、「地区集会を充実させるために」「小教区を活性化させるために」「み言葉の分かち合いとは」というテーマに沿って考えてきました。今回からのテーマは、大司教様が提示しておられる「長崎教区の目標」の中の3つのポイントの一つである、「参加する教会」の実現のためにはどうしていけばよいか、について考えていきたいと思います。

### 「参加する」とは

「アジア司教協議会連盟（FABC）」による司牧プログラムの中では、「参加する」ということばの意味が以下の側面から考察されています。

1. キリストの友情への参与
2. キリストの使命への参与
3. 神の計画への参与
4. 協働責任を担う
5. 参与を可能にする聖霊
6. 全員参加の教会

そこで今回は、「キリストの友情への参与」という側面を考えてみたいと思います。

1990年、アジア司教協議会連盟・第5回総会において、司教様たちは「教会は、全員参加の教会でなければならない！」という指針を出されました。

これに対して、次のように答える人がいるかもしれません。「私たちはすでにそうなっている。私たちの教会にはさまざまな組織があるし、神父様が何かをしたいといえば、信徒たちは素早く対応している。だから、私たちはすでに『全員参加の教会』になっているのだ」と。

そこで、ここでは次のように考えてみることから始めたいと思います。「はたして私たちは、全員が同じように感じているのだろうか」「司教様たちが『全員参加の教会』について語られるとき、実際には何を意図しておられるのだろうか」「司教様たちは、私たちが何に参加することを期待しておられるのだろうか」…。

### 「キリストの友情への参与」とは

1. **「わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである」（ヨハネ15・15）**

キリストは、真の友情についての最も根本的な模範を示されました。

第一に、キリストがいう友情とは、無私の愛を意味します。キリストには、友のためには自分の命を捧げてもいいという心構えができていました。

第二に、キリストは何の秘密も隠し持っておられませんでした。御父から受けたものはすべて私たちと分かち合われました。

第三に、キリストはご自分の愛と友情とを、先に私たちに与えられました。私たちが愛するのを待っておられるのではありません。

キリストがご自分の友情をどのような形で示されたかについては、以下の聖書の箇所からも知ることができます。

- マタイ9・14～15
- マタイ11・16～19
- ルカ11・5～10
- マタイ18・20

2. **洗礼のときに、私たちはキリストの友愛を注がれた**

私たちは洗礼のときに、神の子、キリストの弟子となり、キリストの

友愛を注がれました。また洗礼の更新の際には、キリストの手に自分自身のすべてをゆだねることを約束しています。

では私たちは、どうすればキリストの友愛を日々しっかりと受けとめ、その友情に真の友人として応え、喜んで参与していくことができるのでしょうか。

まず私たちは、あらゆること（気持ち、秘密のこと、葛藤、苦しみや喜びなど）を、すべてを信じ合える友人として、キリストと語り合えなければなりません。

キリストは、友人である私たちのためなら、いつでも時間をあけ、私たちが打ち明けることをしっかりと受けとめてくださいます。だから何かを決心する前には、いつも「主よ、あなたのご意見をお聞かせください」と、キリストにお尋ねすればよいのです。

聖書を読んでも、私たちはキリストのことばを聞くことができます。そして、キリストの目で自分たちの生活を眺めることもできるようになります。「み言葉の分かち合い」は、キリストのことばに聞き入るすべを学ぶための一つの方法だといえるでしょう。

### 3．堅信の秘跡によって、キリストは、ご自分の使命に参与できるようその友を強められる

キリストは、私たちがご自分の真の友人として生きていくことを期待しておられます。ご自分の友人にするために私たちを選び、私たちもご自分の関心事に興味を持ち、ご自分の喜びや心配ごとを共有してくれるようにと願っておられます。そして、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」（ヨハネ20・21）と、この私たちにも言っておられます。

ところで、そのキリストから与えられた使命に私たちが積極的に対応できるような強い人間になれるのは、堅信の秘跡によって与えられる恵みのたまものです。

キリストと12弟子

堅信の秘跡によって、私たちはキリストの霊に強められ、キリストの思いを自分たちの思いとし、み国の完成をめざすキリストのみ業に、互いを理解し合う真の友人として喜んで参与させていただけるようになるのです。

### 4．弟子たちは、キリストの思いをどのように共有できたか

キリストの心からの願いとは、まず第一に、神の国の福音をすべての人々に伝えることでした。キリストと生活を共にしたり、宣教に遣わされたりしていく中で、先生であり友でもあるキリストの思いや心からの願いが何であるかを、弟子たちも少しずつ実感させていただいていきます。

キリストが伝えてくれた福音の中心は、神の愛、神への愛、仲間同士の愛のすばらしさでした。友のために十字架上で命を捧げられたキリストの思いを、聖霊の恵みによって少しずつ理解させていただいた弟子たちは、キリストがいう兄弟愛のすばらしさを心底から理解できるようになり、自分たちも友のために喜んで自分の命を捧げていったのです。

### 5．キリストとの友情を日常生活でどのように証しするか

私たちキリスト者一人ひとりがキリストの真の友人となることができれば、私たち同士も気心の知れた親しい友人となり、キリストが心から望まれた真の兄弟愛の実践が目に見える形でなされるようになるはずです。そうなれば、そのすばらしい兄弟同士の愛は周りの人々に影響を及ぼさないはずはありません。

使徒言行録には、「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有し、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして・・・・喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされた」（2・44～47）ということばで、初代教会の生き活きとした姿が記されています。これこそが私たち教会共同体の原型であり、私たちが目ざすべき教会像ではないでしょうか。

キリストの友人とさせていただいた私たちは、その友情にも参与させていただくはずなのです。

〈シリーズ〉共に生きる信仰

# パストラルケア

## 命に寄り添うケア（3）

盛（もり）　克志（かつし）
レデンプトール会司祭
（臨床パストラル・カウンセラー）

### 仕えるために

ストレスの多い現代社会では、人々のいのちを守り、癒すことができる存在が何かあるのではないかと、多くの人々が探し求めている。そのような社会の期待に、教会はどのように応えているだろうか。「仕えるためにこの世に来られた」主の教えを実践するために、パストラルケアは、この社会において多くの人々へ真の癒しと生きる意味とを提供しているだろうか。

古代から「医療」と「宗教」は多くの関わりを持って来た。しかしながら、科学的思考が重視されるに従って、医療と宗教は異なる道を歩み続けている。人間のいのちの問題は、医学の分野にとどまらず、すべての学問が関与する極めて学問的なテーマでもある。とりわけ、宗教を抜きにして考えることはできない。人間の生物学的いのちは科学としての医学によって支えられ、宗教は人格的なスピリチュアル（霊的）な存在としての人間の心を支える。

生きる意味・目的・価値観の喪失などが叫ばれている現代社会に遣わされている教会が、本来の使命へ立ち返る時である。イエスの教えである「この世に仕えるために」というあり方を再確認することから、今日の教会の存在意義が明確にされていくであろう。そして、教会の内外で「助けを求めている人々」に関わり奉仕し続けるのが、パストラルケアの本来の使命ではないだろうか。

### 「受容」という概念

**「あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのである」**
（マタイ10・40）というイエスのみ言葉に従って、人々を受け入れる必要がある。そして、具体的な「隣り人」として人々を受け入れる方法としては、次の三つのが考えられる。

◆現実的受容

その人のあるがままを見たうえで、すぐには何も判断せず、その人の現実をそのまま認める方法である。「どうしてだろうか？」とか「なぜだろうか？」などという疑問や相手に対する関心事などを離れて、そのまま相手を受け入れるが、そこで大切なのは「共にいる」ということである。そうすることによって、悲しみ、憂い、怒りなどの感情がそのまま受け入れられるならば、その感情の表出している問題の所在に気づくことができるようになる。

◆理想的受容

すべての人を、すべての状況の中で受け入れなければという思いをもって、広く・浅くではあっても、なんとか受け入れようとする方法である。しかし、これは一つ

の「目標」になる受容の方法であるにすぎない。

◆真理的受容

目の前で助けを求めている人を、まずしっかりと確実に受け入れ、全人格的な対応によって相手を支えたいと願う受容である。

これら三つには優劣はなく、その時どきの状況に応じて使い分けられるものである。それらが三位一体となって、「受け入れる」という姿勢を創り上げていくのである。自分がしっかり受け入れてもらえたと感じた時、人は安定感を取り戻し、希望を持って歩み出すことができる。

## 「理解する」とは

理解されることは自己を解き放って行く糸口にもなるが、こちらが完全な理解を求めて行こうとすると、わずかなすれ違いによって、相手を傷つけ、孤独に閉じこもらせてしまう危険性をはらんでいる。

誤った理解とは、次のようなものである。

1．一般化する姿勢

その人固有の苦しみ、悩み、葛藤などを、「どんな人でも」体験していることであるかのようにこちらが一般化してしまうと、相手は自分が理解されたのではなく、無視されたり軽く扱われたりしていると感じることがある。もしも「あなたの苦しみは誰もが経験することですよ」などと言うならば、自分が本当の意味で理解されているのではない、と感じてしまう。

2．道徳的な姿勢

特定の道徳的規範や人生観に基づいて、相手の問題を理解しようとする姿勢のことである。そのような理解が間違いとはいえないにしても、ときどき心理的なすれ違いを起こす恐れがある。たとえば、「子供たちがそれぞれ独立し、自分から離れて、毎日が寂しい」という人に、「子供も自立したんだから、喜んであげなければ…。人生っていうものはそういうものではないですか」などという姿勢で問題を理解しようとしたら、その内容は間違いではないにしても、その人の「寂しさ」は理解されないまま残されてしまう。

3．分析的な姿勢

相手の内面の動きに注目するよりも、いろいろな学問的成果などに基づいて理論的に解釈し、分析しながら理解しようとする姿勢のことである。この手法では本当の意味で共感することはできないし、また真に相手を理解することへとは結びついて行かない。

4．教義的な姿勢

「教会ではこう教えています」とか「聖書にはこう書いてあります」などといえば、相手はお手上げであり、何も言えなくなってしまう。それぞれの苦しみや痛みが、『教え』の前で捨て去られてしまう恐れがある。

## パストラルケアの領域

パストラルケアの領域は、人間全体、全生涯に及ぶものである。単に信仰をもっている人に対してその宗教的信念を持続させたり、信仰がない人に対して宗教的信念を紹介したりするためのものではない。すべての人は、人生の途上でさまざまな苦しみや不安、恐怖などを経験し、そこから生きる意味や人生の目的に対する疑問などが生まれてくる。死に関してもそうである。

パストラルケアとは、そのような状況に直面している人たちが今日まで生きてきた自分の人生の再評価をし、肯定することを手助けするものである。そして、失われた人間性が、信仰によって再生可能になることを実践的に示すものでもある。

長い歴史の中で神から啓示され培ってきた知恵や人間が経験の中でまとめ上げてきた知識は、どのような状況においても、時代を超えて、人々に生きる意味や目的を与えてくれることであろう。

# 典礼豆知識

**＊聖書では「イザヤ書」という題になっているのに『聖書と典礼』のしおりには「イザヤの預言」と書いてあります。なぜですか。**

聖書を典礼祭儀で朗読するときには、聖書のどの箇所が読まれるのかを示す「朗読時の表題」を用いることが『朗読聖書の緒言』という文書に定められています。『聖書と典礼』のしおりは主にミサの朗読の準備や黙想に用いるため、朗読時の表題がしるしてあるのです。典礼の朗読奉仕の際には、この表題を用い、たとえば「使徒言行録」は「使徒たちの宣教」という題で読み始めます。

**＊『聖書と典礼』の朗読箇所に〔括弧〕や（括弧）で書いてあるところがありますが、あれは読むのでしょうか読まないのでしょうか。**

〔括弧〕で表記されているものは読みます。これには二種類あります。

①朗読の冒頭句として補われた言葉、たとえば、〔皆さん〕、〔そのとき〕といった言葉。聖書本文にはないものですが、典礼祭儀の聖書朗読はわたしたちに語っておられる神さまのことばなのだ、と気づかせてくれるものです。

②聖書の本文では「彼ら」、「そこ」などと書かれているもので、指示しているもとの言葉に置き換えられたもの。〔イエスと十二人の弟子たち〕〔カファルナウム〕など、朗読を聴く人に分かるように配慮されています。

（括弧）で記されているものは読みません。「土（アダマ）の塵で人（アダム）を・・」など、原語が韻を踏んでいたり、地名や人名の由来になっていたりすることを説明するために加えられているものです。

**＊小さい頃、福音朗読の前に「主に栄光」と言いながら十字架のしるしをするように教えられたのですが、今はしないのでしょうか。**

『朗読聖書の緒言』によれば、日本では福音を朗読する者が福音書に十字架のしるしをすることになっています。会衆の動作についての指示は特にありません。禁じられているわけでもありませんから、どちらでもよいということになるでしょう。ちなみに、「聖務日課」とか「時課の典礼」とよばれる『教会の祈り』では、福音の歌のときに十字を切るよう定められています。

**＊オルガンの担当をしているのですが、閉祭の歌を選ぶのに困っています。**

ミサの聖歌案を掲載している文書にも、閉祭の歌は「歌う場合は各教会で選んでください」と記してあります。これは、ミサが閉祭の「神に感謝」という言葉で終わっていることに関係しています。ミサはもう終わっているので、聖歌を歌ったり、他の祈りを付け加えたりするのは、各教会の習慣や判断にまかせるということなのです。選曲には典礼季節や福音の内容をヒントになさるとよいでしょう。

（嘉松　宏樹）

Catholic Archdiocese
NAGASAKI

# 被爆60年

# 今、生きて、感謝

赤迫トンネル工場に通っていた実（みのる）さんは、夜勤明けで西町344番の自宅に寝ていた。当時はこの辺を椎立（しいたち）と呼んだ。

突然、音と衝撃があって、目がさめた。うつ伏せに寝ていた背中に、強烈な熱を感じる。呆然と立ち上がると、周囲が燃えている。麦わら家は吹き飛ばされ、外で遊んでいた妹、弟は亡くなった。爆心地から、1･2キロ、原爆を被爆した瞬間だった。17歳の実さんは、幸い、助かった。

父親は仕事で不在。炊事中の母親は閃光が届かず、無事だった。原爆はすべてを奪い去った。洗礼を受け、毎日曜日ミサにあずかっていた浦上天主堂は無惨にも崩壊している。

「あの巨大な、先祖が何十年もかかって築き上げた天主堂が、一瞬のうちに壊れるなんて！信仰すれば、天主さまから守ってもらう、と要理で習ったのに、教会も、やられる時には、やられるんだな」と、実さんは率直に思った。母親の実家が外海・黒崎で、難を逃れて、体力をつける。

あれから60年、今年は被爆60周年を迎えた。実さんの誕生日は10月、この日が来れば満77歳の喜寿を迎えるが、昨年の暮れに、原爆を生き抜いた実さんに大変な出来事が起こった。クモ膜下出血で意識不明となったのだ。脳の血管がやぶれるという恐ろしい、生存率の低い病気である。

実さんの戦後の人生は、いち早く自動車免許を取り、運転業務やタクシー運転を長年勤めあげ、定年を迎えた。その後は駐車場管理で働き、70代になってからは、これから後は、我が人生と、趣味の釣り三昧（ざんまい）で楽しんでいた。

その日も、外海・黒崎の防波堤で、釣りを始めた。「青い海だけは、覚えているんです」と実さん。その後、彼が目をさますのは病室で、一週間、過ぎてからだった。どうして彼が生き延び得たのか、お恵みとしか、言いようがない。

防波堤近くの商店の主人が、長い間、横たわって動かない釣り人を見つけた。「変だぞ」と近寄ってみると、顔は真っ青で、吐いている。警察官を呼び、すぐ近くの病院でレントゲンを撮ると、脳の血管が破れている。救急車で、30キロ離れた長崎の病院に転送される。土曜日であり、肝心の麻酔医が居ない。三日後の手術となった。

一回目の手術で、意識は戻ったが、完全ではない。再び二回目の開頭手術を執刀。その翌日に、「お父さん、お父さん、わかるね」と妻のアヤ子さんが呼びかけると、目をさました。

「あなたは、何と、いうのね」と確かめる。

「西町の実たい。ワイ（お前）は、オイ（おれ）の、ヨメさん、やろーが。おちょくるな」

はっきり応えた実さんは、危険な病気を完全に克服したのだった。西町教会の主任神父さんが言った。「ああ、これは祈りの力だよな」

すべての仕事を退職した70歳から、夫婦で、毎朝のミサを欠かさない。夫婦は結婚44年になる。妻のアヤ子さんは、「夫の回復は、こんなに嬉しいことはない神さまからのお恵みです」と言う。

しかも、もう一つ、入院中に、大きな神さまの恵みがあった。市内に結婚していた娘（次女）さんが、41歳で高齢出産し、かわいい洸太君が生まれたことだ。家族が、パッと明るくなった。

原爆を生き抜き、病気を克服し、いのちは次の世代へとつながっていく。信仰もつながっていく。子どもの頃、実さんは小学校で鉄棒にぶら下がると腕白仲間から、足元に『十字架』を描かれた。「キリシタンは、これを、踏まんとぞ」。実少年は両足を広げて上手に着地した。「ほら、見ろ、キリシタンは踏まん、やったろうーが」

キリシタンの心が、神さまの恵みが、自分を生かしている、実さんは感謝の余生を送っている。

（小崎　登明・おざき　とうめい）

# 原爆ホームを訪ねて・・

被爆60周年を迎えた長崎。現在も多くの方が原爆の傷跡を抱えて生きておられる。

浦上の北東の方角にある三ツ山には、社会福祉法人「純心聖母会」が建てた原爆ホームがあり、多くの被爆者の方々が入所し、残された生涯を「平和の祈り」として捧げておられる。

故ヨハネ・パウロ二世教皇もここを訪れた際、「皆さんの生きざまそのものが・・・戦争反対、平和推進のため最も説得力のあるアピールなのです」と言われた。

そこで、この原爆ホームを訪ね、施設長さんに色々と伺ってみた。

**＊この広大な土地（三ツ山）は、どのような目的で購入されたのですか。**

初めは純心学園の疎開地として購入していました。昭和43年に「恵の丘　老人ホーム」が出来、昭和45年に被爆者養護施設・「原爆ホーム」が出来ました。

初めからこのような広い土地を購入したのではなく、必要に迫られて、次々と購入していったのです。

**＊「恵の丘」と名付けられたのはどうしてですか。**

第二次世界大戦が始まり、1941年に大東亜戦争に突入してからは、日本も国家総動員体制がとられ、学校の生徒たちは軍事工場に狩り出されました。そして、1945年、原爆投下の8月9日がやってきました。一瞬のうちに校舎は焼失、214名の生徒が犠牲となり、シスター江角ヤス（純心学園創立）自身も被爆しました。

この日、高女1年生は職員8名に引率され、飛行機の燃料となる松ヤニの採集に三ツ山へ来ていて、その難を逃れ、次の歌詞にあるようなただならぬ事態に、あわてて下山し、救助活動に当たったのです。

のちにシスター江角は、この丘がなかったら純心の復興はなかったと考え、「恵の丘」と名付けました。

「　めぐみの丘　」作詞・作曲　石川和子

一、みどりも深く　しげるこの森
原爆のおもいもあらたな
このめぐみの丘
もえる町をこえて
まいきたるこげじ紙片
殉難告げたり松のこずえに

二、世はうつるとも
きみが名を知る
人々は世々につぎて
たたえんいさおを
栄光のみくにより
みそなわせおとめら
かの日の犠牲（にえ）は
ここに　花さけり

「原爆ホーム」本館

**＊ここに原爆ホームを作られたのは、どういうきっかけで、いつ頃だったのですか。**

戦後、純心の復興は、原爆のために亡くなった生徒たちへのせめてもの供養だ、と考えました。

またシスター江角は、殉難者となった生徒たちの代わりに、年老いた両親や原爆古老の方々への奉仕のためにという理由から、「恵の丘」に原爆ホームを建設しました。

**＊ここには色々な方が訪問されているようですが、その印象をお聞かせください。**

この4月からは、修学旅行の生徒さんたちが、宗教に関係なく訪れています。交流会を持ち、入所者の方から被爆体験を語ってもらい、自分たちは、学校の紹介や平和に対する自分たちの考えを発表したりしています。平和のために自分たちも何かをしていきたい、という意気込みが感じられるので、若い方々の訪問の際には、こちらが力をいただきます。

最後に、「今までここで亡くなられる方々は、どなたもご家族に見守られて安らかな最期を遂げられています。そのことは、とても不思議に感じられることなのです」と結ばれた。

インタビューが終わると、ホームの中を案内してくださった。

「手芸室」に行くと、お年を召した方々が、ここに尋ねて来る方に差し上げるのだと、生き生きとして、ぬいぐるみを作っておられた。

そこには、平和の雰囲気がただよっていた。

# フィリピン・バナンバン集落での家庭訪問

稲佐教会出身の烏山逸男氏が創設したハウス・オブ・ジョイ（養護施設）の別荘・シャロンハウスがある、ミンダナオ島・東ダバオ州サンイシドロ町バナンバン集落。同ご夫妻のご好意で先日同地を訪問させていただいた。眼下に広がる澄み切った珊瑚礁の海や緑豊かなナツメヤシが茂る自然の景観、人々ののどかな暮らしぶりを見ると、この世の楽園のように思える。しかし、現実の人々の暮らしは貧しく、学用品さえ買えないため、学校へ通えない子供たちが数多くいる集落である。

5月31日（火）午後7時過ぎの夕闇の中、わたしは、烏山逸男・アイダご夫妻がこの町に住んでいる貧しい子供たちのために5年前から始めている、奨学金制度「カシンカシン基金」で学校へ通っている子どもたちがいる、あるご家族を訪問した。「普段その家族が食べているものを一緒にいただくには、食事の時間帯を見計らい、予約なしで訪問したほうがよい」という烏山夫妻の提案で、この訪問が実現したのである。

訪問先のご家族は、シャロンハウスから歩いて1分もかからないところに住んでいた。夫ベンは32歳、妻ネネは35歳。床上式のナッパ葺きで、畳10畳ほどの一部屋だけの簡素な住居に、実に親子7人が暮らしている。5人の子供の内ゼネビーとジャバニの2人が、カシンカシン基金で地元の小学校と高校に通っている。

ご家族は、突然の夜の訪問者にびっくりした。幸いなことに、まだ夕食はしていないという。玄関先で応対した奥様に、「夕食を家族と一緒にいただきたい」というわたしの希望を伝えると、恥ずかしいといいながら喜んで引き受けてくださった。わたしたちは、ご主人が家族7人分と私のために夕食の準備をするまで、狭苦しい玄関先で幼子を抱く奥さんと一緒に待つことになったが、玄関は暗闇である。お互いの顔がまったく見えない夕闇の中で、ひとときを過ごさなければならなかった。この家の夜は、まだランプの生活である。

しばらくして家の中に入ると、家族が食卓で勢揃いして私を待っていた。家族に1個しかない貴重な石油ランプの灯が、家族7人の顔と食卓の料理を照らしている。食卓には、トウモロコシの粉をふかしたものが大皿に、きつく塩を効かせた小さなカツオの焼き魚が数匹小皿に添えてある。普段の食事はそれを分け合って食べるのだという。しかしその日の夕食には、いつの間にか小魚の塩辛がもう1品添えられていた。それは、わたしのために急きょ、隣りで暮らしている夫の両親の家から取り寄せた品である。

この家族は、近海で小漁師をしている父親の働きで生計を立てている。ご主人の話によると、その日は早朝3時から午後3時まで漁に出かけ、釣果は1キロであった。市場でそれをお金に換えるなら70ペソ（日本円で約140円）にはなるという。海上がしけて漁ができないときや不漁のときが続く場合は、食べ物に困ることもあるらしい。烏山氏の話では、食料が尽きたときには近くにあるバナナを採取し、それをふかして軟らかくして食べるか、ココナツをかじったりして飢えに耐えているという。

予約なしの訪問で夕食を共にできたのは、ご家族と烏山ご夫妻のご好意によるものであり、深く感謝している。

# 生活の中の教会

## 信仰の先達

若松島に面する中通島の南端、「池ん口」を眼下にする小高い丘に建つ「桐」教会堂。

旧堂は一部レンガ造りの木造で、「古里」に建立され、数十年に亘って信徒たちの拠り所となった。その後、シロアリの被害を受け、一九五八年、現地に新堂が建立された。旧堂から受け継いだ鐘楼の鐘には、一九〇八年の銘が刻まれている。

桐小教区の独立は一八九七（明治三〇）年、中五島最初の小教区として設立された。その後、浜串、土井ノ浦、真手の浦が小教区として分離独立したが、百年余を越えて今も信仰を伝えている。

この地の信仰の歴史は古い。五島人最初の信徒発見となった十七歳の青年・ガスパル與作（下村鐵之助）は、傷の治療のため長崎に来ていた折、うわさに聞いた大浦天主堂のプチジャン師を訪ね、五島にもキリシタンがいることを告げたという。

教会堂玄関前には「信仰の先駆者顕彰碑」が建つ。潮風に吹かれるその碑は、海を越えて信仰を育んだ歴史の遺功を伝えている。

桐教会　　フォトプラン　山本 富夫